

序
(序破急による第一章)
ほんのわずかなこと

すべてはかたちとなり、いくばくかの後、消えていく。

外、道ばたを歩いている。
夕方。冬の。
今週はずっと雪だ。家に帰るところ。

何年も、毎日たどった道順。
一日の中でも特別な時間。
職場を離れて、家に着くまでの間。
ひとつの中間地帯。漂うような。

慣れた道順。
足が道のりと方向を覚えている。
足どりは雪に合わせている。意識もしていないけれど。
過ぎていく自動車ほどにも。

昼も夜も雪は降り続く。
僕と何千人もの生きているものの上に。
歩きながら、そんなことを思う。
僕のように、家に帰ろうとして、雪の中を、中間地帯にいる人々のことを。

漂うように。

思考の糸が途切れて。
一瞬、意識が離れた。
一秒もたたないほどの間だけれど。
空虚が通り抜けていった。
内側から、何かがぶつかったよう。
不在。

道ばたで呼び止められたかのように。
あたりを見回す。
めまいの感覚にとられる前と、何も変わってはいない。
雪が降り続く。車が過ぎていく。
ほかの通行人は立ち止まることもない。
僕は動かずにいる。

自分の中にしるしを探そうとする。さかのぼって、最後に考えていたこと、今日起きたことを思い出そうとする、気がつかないうちに心に入り込んでいた何かが、突然、湧き上がってきたのではないかと思つて。
でも、何も思いつかない。
いつもと同じように仕事をした。いつもと同じように食事をした。
家に帰るところだった。何も変わったこともなく。

顔に雪がかかって、冷たい。
あたりをぐるりと見回す。
風景はごくありふれて、見慣れたものだ。
一方には雪が降りつもる畑。もう一方には立ち並ぶ家々。
遠くには、道ばたを歩く一人の通行人。
その背中が見える。
何もない。重要そうなことは何も。
注意をひくようなことは何も。
目に止まるのは、ごくありふれたことだけ。

何百回もたどったこの道順。
別に美しくもない。変わったところもない。
ここに立ち止まる理由もない。
でも、動かずにいる。

僕を包み込んだこの不在の感覚のことは、何も分からないままだ。
静かに、雪が降り続く。
不動の感覚が僕の中に広がっていく。
あとき、何かが途切れたような。切れたような。
あるリズムに僕を結びつけていた糸が。世界と。僕と。

空虚がこだましている。
僕は立ちつくす。1メートルも離れていないところを車が過ぎていく。
再び歩こうとする気持ちだけが、僕よりも先に、道を前に進んでいく。
そして遠ざかっていく。もっと信用できる別の主人を探すかのように。
たとえば、雪に気を止めることもなく、歩き続けるあの通行人のような。

雪が積もった畑に目が止まる。
足跡が見える。
遠くまで続いて消えていく足跡。
隣り合わせた二人が歩いていった跡。
あるいは、誰かの足跡の隣を、別の誰かが歩いていった跡。
誰かを探して。
どうでもいいことだ。
数時間のうちに、どうせ雪に消えてしまうこと。

僕は振り返る。
ほとんどの家には明かりがともっている。
どんな動きも浮かんでこない。
生きているものは中に、僕の視線の届かないところにある。
生きているものは壁の向こうにある。

過ぎゆく車の音は、遠く、手の届かないところに行ってしまったよう。
何かが沈黙した。内側から。
気づかないうちに、雪の沈黙は僕のうちにあった沈黙と結ばれた。そして扉を開けた。

気づかないうちに、風景が中に入り込んだ。
そっと、風景は僕の奥に、僕は風景の奥に入り込んでいく。

雪が降り積もった畑に、光が映り込むのがよりはっきりと見える。
ちがう速さで、雲が過ぎていく。
畑の雪に、かなり深く刻まれた足跡。
家々の光、内側で生きているものに揺れるカーテン。
沈黙。
消えそうになるぎりぎりのところを歩き続ける人影。
そして僕の中の不動の感覚。

この風景には何か見慣れたところがある。愛着を感じるほど。
このつながりの感覚は何だろう。微妙で。根強い。
考えることが、難しい。家に帰ろう、と自分に言い聞かせることさえ。
切れてしまった糸をもう一度たどろう、と。

中間地帯は消えてしまった。
この新しい、別の時間のことは、まったく何も分からない。
降り続ける雪を見つめているうちに、まるでさっきまで歩いていた事実さえ存在しなかったかのよう。
それとも、別の現実の中だったのか。

手が — 僕の手？ — 、僕の歴史、過去、欲望、確信、将来を織り上げていた糸を優しく指でとらえて、一本ずつ、それを引き離していく。ゆっくりと、手が結び目をほどいていく。僕の舌をもつれさせて、考えを沈黙させる。

沈黙の中、ある言葉が浮かんでくる。
「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」
はじめは、この言葉の出どころが思い出せない。
そして、しばらくして思い出す。
チェーホフの『三人姉妹』だった。
ずいぶん前に読んだものだった。
どうして何年もたった後に、よみがえってきたのか。
何も分からない。

「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」

この言葉は風景に溶け込み、じきに風景から切り離すこともできなくなる。畑とその足跡、内側から明かりのともった家々、通り過ぎる車、気にはならないけれど、僕の中に入り込んだ冷たさの感覚、ゆっくりと消えていくあそこの人影に溶け込んでいく。

「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」
唇の端まで出かかる。
ごくありふれた冬の夕方、この言葉をつぶやく。
家に向かう途中の、毎日通る道ばたに立ち止まって。
雪は降り続く。

破 展開

すべてはかたちとなり、いくばくかの後、消えていく。

立ち止まったときの痕跡も見失ってしまった。
だいぶたつたにちがいない。それも忘れてしまった。
時間の尺度の感覚もない。
何時間か。何分間か。
分からない。

通行人たちも、中間地帯を離れて、家に着いたにちがいない。
椅子に座って、足や髪のを乾かしていることだろう。
あるいは台所で、食事の準備をしているところか。
もう彼らの姿は見えない。
壁の向こうで生きるものところに戻ったのだ。
明かりのともった窓際を彼らが過ぎるときに、カーテンが揺れるのが見える。

そこにいるのは、彼らでなく僕でもおかしくなかった。

でも僕は動かずにいた。
道ばたで、子どもか病人のように、無防備なまま。
空から落ちてきては、町に降りつもる雪を見つめている。

自分の一部が何かに隠れて、見えなくなる。
いつもの自分、仕事に行き、家に帰り、過去を記憶し、未来を想像することができる自分、考えや気持ちや感情を表現する自分が、雪に埋もれて見えなくなる。
自分の足跡を見失ってしまった。

まるで心の中に雪が降っているような。
今では、僕の中に一面に白く雪が広がっている。

「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」

なぜ立ち止まったのか、今でも分からない。
つじつまは合わないけれど、それも受け入れた。じきに意識もしなくなった。
世界の外に出てしまったような、けれど同時に世界の前に置かれているような感覚を覚える。

あのつながりの感覚が残っている。
自分を取り巻くものすべてに対する、質素で直接的なある種の愛着。
まるで気づかぬうちに境界線を越えてしまったように、その向こうでは、風景のばらばらの要素が、僕と共鳴しはじめる。
共鳴。絆。
かすかな振動のように。

ここでは何もすることもない。

何もしなかった、でもすべては立ち現れた。
僕はそこを離れずにいる。
まるでこの瞬間、すべてのつり合いがとれているのは、この場所だけであるかのように。

風景の奥行きには、限りがないようだ。
畑は平らで、木も生えていない。視界の果てまで続いている。
畑の足跡もほとんど見えない。
遠くまで続いて消えていく。
雪がすべてを覆い隠す。
じきに何もなくなるだろう。
二人が畑を歩いていったことを証明するものも。
その足どりの理由を説明するものも。
ある日、雪の中、足跡を見た記憶だけが残るだろう。
さらに。それさえももう確かではない。

前を見る。
路上の人影はまだそこにいる。
雪に視界を遮られて、でも遠くに見える。
自らの消滅と戯れるように、視界から消えては、降り続く雪の向こうに再び姿を現す。

道は静かになった。
車は止まったのか。駐車場に収まったのか。
もう聞こえない。

雪はどんな音も立てない。
雪の沈黙は広がって、あたりの音を消す、指でろうそくの炎を消すように。
何かを言おうとしても、どんな音も喉から出てこない気がする。

たぶん、この言葉以外は。
「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」
今は思い出した。ほとんどどうでもいいような台詞の端に書かれた言葉。どんな登場人物の運命も変えることがない。何も引き起こすことがない。

第二幕、マーシャは問いかける。
「でも、それにも意味があるんじゃない？」
トゥーゼンバフはそれに答える。
「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」

あまりに単純すぎて理解できないかのように。

ある何かに意味があるのかどうか。
道ばたに立ち止まろうと、家に帰ろうと。
雪は気にもかけない。
雪はすべてをひとつにする。
雪はすべてを覆い隠す。
畑、道、止められた車、家々の屋根。

町全体まで。
すべてが無防備で。
差し出されたかのよう。

僕の体は冷たさに包まれている。
逃れようという気も起きない。
手と足の先は麻痺してしまった。
この瞬間ほど、冷たさを体全体で感じたこともなかった。
生きるために必要なすべての見せかけを取り払われ、道ばたに裸で置き去りにされた。
そして奇妙にも、生きている実感はずっと強くなった。

「意味？ ほら、雪……。意味なんてどこに」

これこそが現実なら。
幻影はこの言葉の中にも、ごくありふれた風景の中にも、動かずにいる僕の中にもなく、ほかのものすべての中にあるのなら。

遠くの人影は立ち止まったようだ。
こちらに向かって戻ってくる気がする。
雪と、超えることができない距離とに隔てられて、互に見つめ合う。

この瞬間は、瞬間そのもの以外の何物にも結ばれていない。
どんな将来も描き出そうとはしない。
どんな将来にも関心を見せない。どんな理由にも。どんな目的にも。

深まる雪の向こうで、人影はきつとまた歩き始めたと思う。
そしてすぐに、見えなくなる。

畑の方を見ては、この畑の前に、どんな希望もないことに気づく。
何も想像しない、何もほしくない。
どんな記号も、言葉も、教えも期待しない。
僕は、そこにいるだけ。畑もそこにあるだけ。

気づかないうちに手のひらを開いていた。
そこに雪が落ちては、肌に触れて溶けていくのを見ている。
じきに手のひらには、水しかなくなるだろう。
手のひらのくぼみに、すべてが尽くされているかのよう。
すべて、水でしかない。
町を覆う一面の白さも、僕の指の間を流れる水でしかない。

雪が溶けては、心の中で、新しくできた深みに共鳴するようだ。
何かがそっとこわれようとしている。場を譲り渡そうとしている。
何の抵抗もしない。

顔に雨粒が感じられるようになった。
忘れる。

僕の意識は、指の間を流れる水のように。

急

すべてはかたちとなり、いくばくかの後、消えていく

雪についての、こうした思いと考え。
これらの道。
もう何もない。手がかりになるようなものは何も。
雪は手の中で溶けた。まわりでもすべて。

雨が町を包んだ。
僕は、動かずにいたその場所から、風景が溶けて、別の表情のもとにつくり直されるのを見ていた。雪は雨に場を譲った、僕は動かずにいた。

自然はすべてを忘れた。
子どもが、新しい遊びを始めて、今していたばかりの遊びを忘れるように。

僕は相変わらず、道ばたに止まって、動かずにいる。
でも何かが変わった。
突然、誰かが握っていた僕の手を離れたかのように。

同じ風景だけれど、別のものになってしまった。
自然が、新たなページをめくったのだ。憂鬱に思うこともなく。惜しむこともなく。
終わったのだ、何のメッセージも手渡さないまま。
意味はどこに？
チェーホフの言葉も雪とともに見えなくなった。

あたりを見回す。
雨は、畑から雪の衣裳を脱がせた。
何の跡も残ってはいない。
足跡、思い出、静けさ、雪。
みんな土と一緒にになった。
今では、見渡す限り、畑は裸で泥まみれになっている。

顔に当たる雨を感じ、その音を聞きながら、何かが終わったことに気づく。
きわめてはっきりとした感覚。
道ばたに突然立ち止まったときのように。

そのことでどこに行き着いたのかも分からない。
そのことの意味も。
心の奥では何かを期待していたのかもしれない。
雪が自分をどこかに連れて行ってくれるのではないかと。
雪は僕を自分に差し戻しただけだった。
そして僕は手にも何も持たず、そこにいた。
何も知らないまま。

「意味？ ほら、雪・・・。どこに意味が」

雪については、もう手遅れだ。
でも、雨についていえば、始まったばかりだ。

あらゆるところから音がやってくる。
雨どいを水が流れているのに気づく。
道路の舗装、畑、屋根の上に降る雨の音。
後ろの方から車の音がする。近づいてきて、僕を追い越して、ちょっと先で大きな水しぶきを上げた。

何かが終わったのだけれど、風景はそこにあって、同じように僕の中に息づいている。
水たまりに落ちる雨粒が、幾千もの水紋を広げるのを見ている。

そして僕は遠くを見やった。人影は消えている。
一瞬、不在の感覚が僕を通り抜ける。
親しい誰かと別れたみたいだ。
手のひらの水のことを考える。
雪は消えたわけではない。かたちを変えただけだ。
人影もたぶん同じなのだ。

開け放しにしたままの窓のそばで眠ってしまい、目を覚ましたときのようだ。
体の奥まで冷たさが入り込んでいる。
手も足もほとんど感覚がない。
足と背中は痛いし、膝は寒さに痺れている。
僕はびしょ濡れになってふるえている。
でも理由は説明できないけれど、この苦痛を感じるのに、満足してもいるのだ。

生きているという相変わらずのこの鋭い感覚。
つながっていたいという相変わらずのこの欲望。

心の中で、あの雪の風景を再構成しようとしても記憶には足場もない。僕の心の中の壁はつるつるしている。
。
ここしか見えない。今しか。

果たして何事かを学んだのかも分からない。
果たして何らかの言葉を受けとったのか。

「意味？ ほら、雪・・・。どこに意味が」

この旅にも、もう何も残っていない。
何か重くなったわけでもない。何かを運んだわけでもない。
空っぽの手を見つめる。
不動の状態に少しずつ亀裂が入っていく。
しばらくして、足を地面にしっかりと置く。
再び歩きはじめる。

灰色の空は雲でいっぱい、ぼんやりした光を放っている。
朝方なのか夕方なのかよく分からない。
僕のつり合いはまだ不安定だ。
歩くことを覚えたばかりの子どもにきつと似ているだろう。

しばらくすると、体も温まってくる。
痛みも和らいでくる。
歩いていても、通行人に出会うこともない。
見えていないだけかもしれない。
何も考えない、心の赴くままに任せる。
雪のことを忘れる。
今、起きたことをみんな忘れる。
雨音を聞きながら、足どりのリズムの中に僕は溶けていく。
こうして長いこと、まるで継ぎ目の中を歩くように歩いていく。

「意味はどこに」
この言葉がまた頭によみがえる。
注意もせず聞き流していたのに、夜、気がつくと口ずさんでいるラジオの音楽のように。

しばらくすると、僕の家がある道に出る。
一番奥に、明かりのついた自分の家が見える。
仕事に出かけたとき、電気を消していったかどうか覚えていない。
まわりの建物、低くなったところに停めてある車に気づく。
みんな見慣れたものばかりだ。

近づくとよりはっきり見える。
弱々しい雨の中、何かが見える。
僕の家窓に、動かずにまっすぐ立っている人影がいる。
僕の方を向いている。
窓ガラスを伝う水のせいで、完全には見えない。
この距離だと、雨がまだその顔を隠している。

でも感じる、僕の方を見ているのを。
ずっと長いこと、この場所にずっといたことを。
差し出された雨の風景を見つめながら。
まさにあるべき場所で。

エピローグ

チェーホフは死の直前に、彼が唯一愛したリディア・アレクセーエヴナ・アヴィーロワにこう書いている。
「あなたにとってよいことがたくさん起きますように。とりわけ、人生をあまり複雑に考えすぎないで。生きることは、人が思っているよりもずっと単純なのです。生きることについて、私たちは何も分からないにせよ、それが、私たちのかわいそうな脳を疲弊させるほど苦痛に満ちたあらゆる思考に値するものなのか、私は疑問に思います・・・」